

緑内障患者の問題となる性格調査

発表者 松岡明子

眼科病棟一同

I はじめに

当科では緑内障患者は年々増加しつつある、昭和47年入院患者19名だったが、昭和48年には35名となった。緑内障患者は、一般患者と異なる性格、情緒不安定の面があり問題があるのではないかと思われる。多くの緑内障患者は協同生活ができにくく、自己中心的であり、又本疾患は予後不良の症例も多く患者は術後の視力回復に全神経をつかい、眼圧の上下に一喜一憂している事が多く、そのことが入院生活、社会生活への適応をはばむ。治療と社会復帰に対する不安をなくす為に良く性格を知り、今後の看護に役立つものがあればと思い取り組んでみることにした。

緑内障とは別名青ソコヒとも言われ、眼圧上昇により起こるものを言い、急性と慢性に大別される。急性の場合は頭痛、眼痛と共に微痛であり嘔気嘔吐、結膜の毛様充血を起し救急患者として来院するが、ともすると内科受診する例も少なくない。又適切な処置が行なわれ、手術及び内服薬、点眼薬にて失明に至らずにすむが、放置すると短期間に失明する場合もある。慢性においては自覚症状がなく、視野狭窄が徐々に進行し本人が気付くのが遅い場合が多く治療に困難がともなうが、早期に発見ができれば内服薬、点眼薬でおさえる事も可能であるとも言われているが、一生の病いであり、定期的受診を要する疾患である。

II 対象

期間、昭和48年12月～同49年2月迄

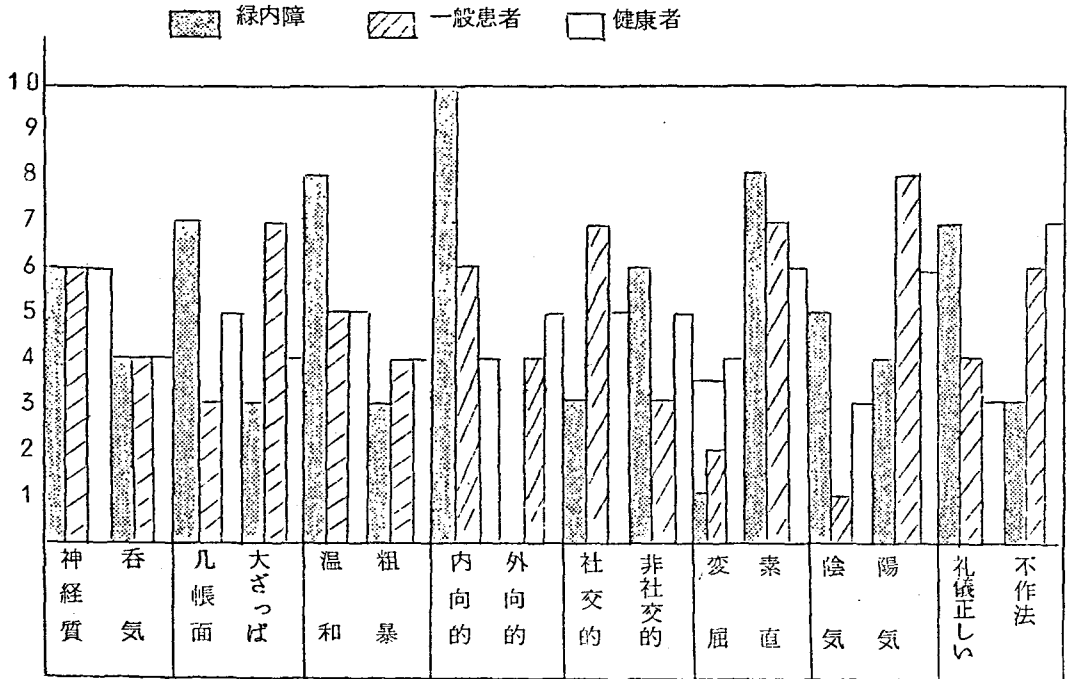
年令 25才～75才迄の男女

対象者 当科入院の緑内障患者10名、白内障網膜剝離等の一般患者10名、健康者(職員)10名を選択した。

III 調査方法

緑内障患者の性格がどの様な結果で表られるかをアンケート方式で行った。

(別表参照)



IV 調査結果と対策

調査の結果は主として、緑内障患者は神経質な人が多いと思い調査を開始したが、患者自身は特に神経質だと思っておらず他の対象者との差は認められなかったが、看護者から見た場合は神経過敏と思われる面が多く、たとえば睡眠の問題については異常なほど訴えが多く、同室者のいびき、夜間の電話のベルの音、水洗トイレの音等で不眠となり睡眠薬を希望する。又他患者との協調性がなく、気にさわることを言われると3・4日間も腹がたっておさまらなかつたり、又他人の行動が気にいらず、個室を希望するが、それを素直に看護者に言い出せず、悶々とした憂うつな日々を送りがちである。

内向的か外向的かについては、患者は全員が内向的と思っており、この点は看護者から見た傾向と一致している。

素直か変屈かでは患者自身は素直と答えているが、看護者が感ずるところでは、むしろ、変屈な面がみられ、理屈っぽく自己主張をまげず、一般患者より一段高いところから見おろしている様な面が見られる。以上各点について上げてみましたが、自覚的な患者の答えと看護者よりの観点との間に開きのある事に気づいた。

緑内障患者は夜間不眠を訴える者が多い為、不安除去に心掛け、不眠の原因を調べる為、コミュニケーションを充分に行なったところ、こんな事と思われる事が話されないままに大室屋ではカーテンで個室を作る事が多くこの様な状態になると仲々話しくくなる為、患者の好む話しをみつけ

だす事に勤め、清拭、洗髪、爪切等しながら、患者自身積極的に話しができる様にしてみた。他人のなにげない言葉が気になる為、言葉使いにはつとめて注意し、他の人達と進んで話しができる様に話しの糸口をつくってやる様につとめる。

視力・視野にも障害がでてきている為、毎日不安で、いつ失明するかという事をひとときも忘れられない。病状の説明を医師にしてもらい落ちつく場合があり、病気の正しい認識と患者の啓蒙を怠ってはならないと思う。まず内服薬・点眼薬により眼圧が正常化してゆく事を説明し、術後視力回復についても一般患者より敏感である為、説明に対しても受け持ち医とカンファレンスを持ち必要な説明のみにして納得させる様注意した。

長期疾患の為、眼圧上昇に気付き受診する患者の多くは常に点眼薬、内服薬でコントロールするが、眼圧計測時医師のつぶやく眼圧の上下に耳をそばだててきき、いち早く知る気のつかないよりは他の患者と異なるところであり、そこでむやみに血圧同様知らせて良いか悪いかも性格を知っていないと悪影響を及ぼす事があるので充分注意するようにした。日常落ちつけない時は必ず眼圧が上昇し、頭痛、眼痛、肩こり等訴える事が多く、自分なりに気持をおさえないと眼に悪い事を話し患者も納得して、自分から治していきたいと希望する人が多くなってきた。

V 考察及び反省

以上調査して知ることができた患者の訴えたいことが、言えないといういくつかの問題点を、神経質で、と一口にかたづけられない。表面的に判断しにくい色々な場面を常に私達は面接によって患者の一番訴えたいものを早く充分に知る知識を持たなくてはならない事を痛感した。

仕事に追われ患者に接する時間が少ないというのではなく、どの様にしたら患者さんの気持ちになり話し合える事が出来るかを、看護する者はひとときも忘れる事なく、明るい信頼される態度で接し良き相談相手になれる毎日でありたいと思います。